

家賃の引き落としまで、あと五日。

残高は一万二千元。どう逆立ちしても足りない。派遣社員なのだが、先月は体調を崩してシフトに穴を開けた分をこっそり引かれたのが痛かった。次の給料日までは一週間もある。

実家に電話すれば済む話だったかもしれないけれど、三年前に「もう頼らない」と言って出てきた手前、それだけはできなかった。

パパ活、という三文字をスマホで検索したのは、終電間際の地下鉄の中だった。

レビューの多いアプリをインストールして、プロフィールを埋めた。写真は、職場のランチで撮ったやつ。盛りすぎないけどちゃんと盛れているやつを選んだ。年齢は正直に二十五歳。「まずはお食事から」にチェックを入れる。

食事だけ。一緒にご飯を楽しくおしゃべりしながら食べるだけ。それ

以上のことは絶対にしない。

メッセージが来たのは翌日だった。プロフィール写真なしで、年齢は四十代。年収欄だけが埋まっていて、その数字がちよっと現実味のない桁だった。文面は簡潔だったけど、丁寧で、変な下心が滲む感じもない。他にまともなメッセージもなかったから、とりあえず返信してみた。

メッセージのやり取りも紳士的で、いやらしさを全く感じない。

翌日の土曜日に、都内のイタリアンで会うことになった。

——第一印象は「ずるい」だった。

写真がなかったから中年太りの小汚いおじさんを覚悟していた。実物は全然違った。

背が高い。百八十はある。細身だけど肩幅が広くて、ダークネイビーのスーツが嫌味なくらい似合っていた。銀縁の眼鏡の奥は切れ長の二重で、黒髪をオールバックに流している。四十代という情報がなければ三

十代後半で通る顔立ちだった。肌が綺麗で、顎のラインが鋭い。笑うと目尻にだけ薄く皺が寄って、それが唯一この人の年齢を教えてくれた。声が低い。落ち着いていて、よく通る。店員に注文する声だけで、隣のテーブルの女性が振り返っていた。

嶺二さん、と名乗った。仕事の話は曖昧にはぐらかされた。聞けば答えてくれるのに、答えの中身がするりと抜けていく感じ。

食事は美味しかった。ワインを選んでくれて、料理に合わせて説明してくれて、でもひけらかす感じがなくて、聞き上手だった。気づいたら自分の話ばかりしていた。派遣の愚痴とか、上京した理由とか、普段人に言わないことまで。

デザート皿が下げられた頃には、緊張はほとんど解けていた。

「今日はありがとうございました。楽しかったです」

嶺二さんはグラスを置いて、穏やかに笑った。

「こちらこそ。——じゃあ、送りますよ」

それだけだった。食事代を全部払って、タクシーを呼ぼうとしている。終始紳士な態度を崩さず、体の関係を匂わせもしない。

——でも。

食事だけじゃ、ギリギリ家賃に足りない。

帰ったらまた残高を見て、また眠れない夜を過ごす。支払日までにまた誰かとマッチングして、ご飯に行かなければならない。そして、その相手が今日みたいがいい感じの人だとは限らない。

「……あの」

声が震えていた。タクシーを呼ぶためにスマホを操作していた嶺二さんがこちらを振り返った。

「……この後、ホテルとか……行きませんか」

言ってしまった。口に出してから直球すぎたか、と後悔した。心臓が

うるさい。

嶺二さんのスマホを持つ手が止まって、こちらを見た。切れ長の目が少しだけ見開かれて——それから、困ったように眉を下げた。

「……急だね」

責めるトーンじゃなかった。ただ、少し驚いている。スマホをポケットに戻して、こちらに向き直った。

「聞いていい？——もしかして、お金に困ってるの？」

見透かされた。一発で。顔が熱くなった。

「……こ、困ってない、です」

「うん。困ってるんだね」

穏やかに笑われた。否定しても無駄だと分かった。この人は多分、嘘を見抜くのが上手い。

「別に責めてるわけじゃないよ。——ただ、お金のためだけに無理して

るなら、それはやめたほうがいい」

「無理じゃ——」

「食事中、ずっとメニューの値段見てたでしょ。右上のほう」

言葉が詰まった。全部見られていたんだと思うと羞恥で顔が赤くなる。
「切羽詰まってそうなところを見ると家賃の支払いかな？」

「……はい」

「いくら足りないの？」

「……それは……」

「言いたくないなら無理には聞かない。——ただ、お金の話とこの話は別にしよう」

嶺二さんが一歩近づいた。夜風でコロンの匂いがふわりと届く距離。
「僕みたいなおじさんが言うのも変だけど。君みたいな子に誘ってもらえるのは、正直、嬉しいよ」

照れているわけでもなかった。事実を伝えているだけの声。でもその「嬉しい」が、妙にちゃんとしていた。お世辞じゃなくて、本当に嬉しいのだと分かる言い方だった。

「——でも、義務感で来られても、お互い楽しくないでしょ」

「義務感じゃ……」

「じゃあ何？」

聞かれて、答えに詰まった。お金のため。それ以外の理由なんてないはずだった。でも——この人と食事をしていた二時間が、ここ最近で一番楽しかったのは事実だった。

「……嶺二さんと、もう少し一緒にいたいなって」

自分でも驚いた。嘘じゃなかった。半分はお金で、半分は本当だった。嶺二さんが目を細めた。眼鏡の奥で、切れ長の目が柔らかくなった。

「——そういうこと言うの、ずるいな」

ポケットからスマホを出し直して、タクシーを呼んだ。私を帰すためにやなかった。

ホテルは嶺二さんが選んでくれた。タクシーで十分ほどの距離。シテイホテルの上層階。部屋は広くて、窓から夜景が見えた。

ベッドの端に座って、膝を揃えた。指先が冷たかった。

（仕事。これは仕事。別に初めてってわけでもない。カッコいいおじさんとエッチして、それでお金をもらう。それだけ）

そうやって、自分に言い聞かせる。

嶺二さんはジャケットを脱いで椅子の背に掛けた。ネクタイを緩めて、ベッドの隣に腰を下ろす。さつきよりも濃厚にコロンの香りがした。甘

すぎない、ウツディな匂い。

「緊張してる？」

「……してないです」

「うん。してるね」

ふ、と、笑われた。馬鹿にした感じじゃなくて、困ったような、柔らかい笑い方だった。

顎に指をかけられた。顔を上げさせられて、唇が触れた。軽いキスだった。柔らかくて、丁寧で、急がない。舌は入れてこない。嶺二さんの唇が離れて、鼻先が触れ合う距離で、目が合う。

「……大丈夫そ？」

「……はい」

「そう」

次のキスは少しだけ深かった。唇を割って舌先が触れる。私の舌に絡

まって、吸われて、離れて。何度か繰り返すうちに呼吸が浅くなってきた。

（キス……上手い。丁寧すぎて、変な感じ。お金を払う側がこんなに

――）

嶺二さんの手が首筋に触れた。キスが途切れて、唇が顎のラインを辿り始めた。耳の下。首の横。鎖骨の上。唇だけで触れている。肌の上を滑るように、ゆっくりと。

「ん……」

声が出た。小さかったけど、静かな部屋の中ではつきり響いた。

「――いい声」

鎖骨の窪みに唇を押し当てたまま、嶺二さんが言った。

（……は、恥ずかしい……）

「声、我慢しなくていいよ」

穏やかなトーンで、食事中と変わらない声。なのに鎖骨に触れている唇が開いて、初めて舌が肌に触れた。

レロオ……♡

「ひっ……♡」

鎖骨の窪みを舐め上げられた。温かくて、湿っていて、ぞわりと背筋が震えた。舌先が鎖骨の線をなぞって、首筋に戻って、耳の下に触れる。

レロ……レロ……♡チュ……♡

「ん……♡あ……♡」

（だめ。感じてるわけじゃない。くすぐったいだけ――）

嶺二さんの手がブラウスのボタンに触れた。

「脱がせても大丈夫？」

わざわざ聞いてくるところが、ずるいと思う。断れる空気を作るくせに、絶対に断らないことを分かっている。

「……はい」

ボタンが上から外されていく。ブラウスが肩から落ちて、ブラジャーだけになった。嶺二さんの目が一瞬だけ下がるけど、表情は変わらない。

「綺麗だね」

「……っ」

褒めているのかどうかも分からないトーン。でも低音のイケボで囁かれるだけで、お腹の奥がキュンとなった。

背中に手を回され、ブラのホックを外された。

（……手慣れてる感じ）

そりゃあこんなイケオジだもの。さぞおモテになるだろうと一人納得しているうちに、ブラを外されて、冷たい空気が胸に触れた。

嶺二さんの顔が胸元に降りてきた。唇が鎖骨から下がって、胸の上の皮膚に触れる。柔らかい場所を避けるように、胸の丸みの外側から内側

へ、ゆっくり唇を滑らせていく。乳首には触れない。

レロレロ♡チロチロ……♡

「あ……♡ん……♡ん」

胸の谷間に舌が這った。左の胸の下を舐め上げられて、右の胸の横を舐められて、円を描くように乳首に近づいてくる。でも触れない。ぎりぎりで逸れて、また遠回りする。

(なに……じれったい……)

嶺二さんの舌が乳輪の縁にレロォ……と触れた瞬間、背中が勝手に反った。

「ん……っ♡」

「——ここ、弱い？」

聞きながらも一度同じ場所を舐めた。乳輪の際を舌尖でなぞる。輪郭をゆっくりと。一周。二周。乳首を避けて、周りだけを。

レロ♡レロ♡チロチロ♡♡

「ん……っ♡あ……んう……ふあ……♡♡」

乳首がピンと硬くなっているのが自分でも分かる。嶺二さんも絶対に気づいているはずなのに、そこには触れてくれない。

「嶺二さん……」

「ん？」

「……意地悪しないで……ください……」

何を言っているんだろう。これは、ただのパパ活で、お金をもらうための仕事なのに。

私の情けない懇願に、嶺二さんが小さく笑った気配がした。

「意地悪じゃないよ。——ゆっく……り、味わってるだけ」

その言葉と同時に、乳首を口全体でパクッと覆われた。

ヂュッ♡♡

「ひっ♡♡」

唇で挟んで、吸い上げられた。

「ふふ。君のピンク色の乳首、ツンツて上向いてて、舐めて舐めてゝつて懇願してるみたいだね」

「……っ、な……」

恥ずかしすぎて言葉が出なかった。穏やかな声で何てことを言うんだろうこの人は。反論する間もなく、舌先で乳首の先端を弾かれた。

ツンツ……ツンツ……♡♡チュパッ♡♡

「あっ♡んっ……っ……♡♡」

舐めて、吸って、舌先で転がして、また吸う。合間に奥歯で軽く甘噛みされた。

カリッ♡♡

「んあっ!?!♡♡か、噛まないでっ……♡♡♡」

「痛い？」

「痛くは……ないけど……♡♡」

「ないなら、大丈夫。すぐ気持ちよくなる」

甘噛みしたまま舌先で転がされる。同時に、もう片方の乳首を指で挟んで引っ張られた。

カリカリ……レロレロ……♡♡キュ……キュッ♡♡

「ひあ♡♡そんなに引っ張られると……なんか……変……♡♡」

「変？ どう変なの？——君の乳首はどんどん硬くなってるけど」

チュパツとわざとらしく音を立てて口を離して、嶺二さんは舌を反対側に移した。指で弄られて敏感になっていた乳首を、熱い舌が包む。

デュウツ♡♡

「あっ！？♡ん……ッ♡♡やだあ……ふえ、んう……♡♡」

（胸だけなのにお腹の奥がきゅってなってる……♡♡下も……きつと

――

「――可愛い反応だね」

嶺二さんの舌が乳首から離れた。唇が胸の下に降りて、肋骨を辿り、お腹に向かっていく。臍の横を舐められた。腰骨の上を唇で撫でられた。どこを通っても丁寧で、舌が肌の上を這うたびに身体の芯が疼いた。

「ちょ……そっちは……♡」

「……ふふ。期待させちゃってたかな？」

唇が下腹部に触れたまま、指がスカートのファスナーに触れている。

「――ここも、味わいたいから」

スカートがスリりと下ろされた。ストッキングも一緒に。下着だけになった下半身に、嶺二さんの生温かい息がかかった。顔が……近い。太ももの内側にちゅ……と、唇が触れた。

レロレロオ……♡

「あ……っ♡そこ……♡♡」

太ももの内側を舐め上げられている。柔らかい場所を舌先で撫でて、唇でぢゅ……ぢゅ……と吸って、また、ねっとり舐め回して。付け根に近づいたと思ったら、急に遠のいて、太ももをはむはむしていたと思ったら、また付け根に戻ってきて。もどかしさに、おまんこがうずうずしてくる。

チュル……チュル……♡♡レロレロレロォ……♡♡

「んっ……やあ、んふう……むう……♡♡」

（また焦らしてる。わざとだ。わざと触らないで、こっちが我慢できなくなるのを——）

下着の上から息を吹きかけられた。それだけで腰がびくつと跳ねた。「……ふふ。ずいぶんと濡らしているね」

嶺二さんが柔らかくそう言った。スッと、指先がびしょびしょの下着

を掠めた。

「わあ……下着透けてるねえ？ 焦らしちゃったかな？」

（や、やだ。全部、バレてる——）

「恥ずかしがらなくていいよ。僕みたいなおじさんにでもこんなに感じてくれるんだって思うと……すっごく興奮する」

「……っ♡」

下着をそっと引き抜かれて、直接空気が触れる。反射的に脚を閉じようとしたけれど、嶺二さんの肩が間にあってうまくいかない。

「……綺麗なおまんこだね」

「……な、なに、言って」

「……舐めがいがあるそうだ」

顔を近づけて、鼻先をクりに押し付けられる。すう……と匂いを嗅いでいる。

「……っ」

「んっ……いい匂いだ。シャワーも浴びてない雌の匂い」

「な、や、やめて……そんな、かがないで……」

「なんでだい？君だっご馳走が目の前に出されたら、匂いを嗅ぐだろう？」

「……それは……」

レロオオ……ッッ♡

「ひっ！？♡♡」

嶺二さんは、ゆっくりと味を確かめるみたいに、割れ目に舌を這わせた。

「——んん……美味しい。しょっぱくて、甘くて、汗と君のお汁が混ざって……最高だ」

そう呟いて、今度は割れ目に舌を押し込むように、啜りあげてくる。

レロレロオ……♡♡チュル……ヂュヂュヂュ……♡♡

「あ、やだ……中、やつ♡♡舌入れないでっ……♡♡」

「それは無理な相談だねえ……？ここ、びらびらの内側、すごく柔らかい」

舌先でびらびらの間を丁寧になぞられた。左側をツーツと舐め上げて、右側は唇で挟んではむはむと味わっている。そして、間に溜まってきた蜜を掬い取るように啜っている。

チュルチュル……♡♡レロレロレロ……ジュルツ♡♡

「ひいひいっっ！？♡♡そんな、丁寧に、舐めないでええっ♡♡」

「こうやって……んー……じゅる……じっくり味わうのが……レロオ……いいんじゃないか……」

「んっ……ツツ♡♡や、やらあ……入り口のそこ、ずっとされると

っ……♡♡」

「されると？」

「……っ♡♡」

「言ってごらん。——何が、どうなるの」

（この人、絶対、分かってて聞いている……！）

「……変に……なっちゃうのお……♡♡」

「変に……ねえ。——もっと変にしてあげようか」

舌が割れ目より上に移動した。クリの皮の上を、舌の腹でべろりと舐め上げる。

「ひあああっ！？♡♡」

「ここか。——皮の上からでも十分気持ちよさそうだねえ？ 誰かに調教されたの？ それともオナニー？」

「ち、ちが……」

「皮、剥いて舐め舐めしてあげようね」

「えっ——」

指先でクリの皮を押し上げられた。小さな突起が剥き出しになる。空気に触れただけでびくりと腰が跳ねた。

「——小さくて、可愛いね。ぷっくりしてる」

「……あ、そこは………」

「期待しちゃってた？ 小さいながらもちゃんと勃起してるよ？——これから僕にたっぷり舐められるのが分かってるみたい」

「そんな……っ」

「……はあ……この小さなクリを……散々いじめて、おつきく調教したいなあ……」

「……ん、な、なに……」

「あーむっ」

「んあぁっ!!?♡♡」

チロチロチロ……♡♡チロチロチロ……♡♡

むき出しの突起を口に含まれ、舌先で転がされると、それだけで脳の奥が痺れる。

「~~~~ッッ!!♡♡む、むり、むりむりいいいい♡♡」

「ん……お汁がいっぱい漏れてきたねえ? 気持ちいいって教えてくれてるんだね。偉い偉い♡」

舌先でクリの先端を転がしながら、嶺二さんの指が入り口に触れた。舌はクリに吸い付いたまま、指が入り口の周りを撫でて、濡れた蜜を指先に絡めて、ゆっくり中に入ってきた。

ぬちゅ……♡♡

「あぁっ♡♡ゆび……舐めながら……入れるのお……?♡♡」

「舐めながらのほうが力抜けるでしょ。——ほら、すんなり入った」

確かにそうだった。クリを吸われている快感で身体が緩んでいて、指が抵抗なく奥に進んでいく。

嶺二さんの指は細くて長い。壁のざらついた部分を指の腹で撫でられた瞬間、思わず腰が浮いた。

「——っ♡♡」

「見いつけた♡」

嶺二さんの声のトーンが変わった。穏やかさは残っているけど、その下に熱が滲んでいた。

「ふふ。ここ押すと、中がぎゅって締まるね。——可愛い反応。いっぱいグリグリしてあげるからね」

グリ……グリグリ……♡♡

「あ……んおお……そこ……やあっ……♡♡ぐりぐりやめてえ〜」

……♡♡」